

幻覚を主訴とする二つの症例

昭和38年9月16日 受付

信州大学医学部神経科

(主任: 西丸四方教授)

石井金助

Über Zwei Fälle von den Halluzinationen

Kinsuke Ishii

Nervenklinik, Schinschu Universität, Matumoto

(Direktor: prof. Dr. Schiho Nischimaru)

症例 (第1)

27才, 男, 店員, 昭和34年夏日本脳炎に罹り某病院に入院治療し経過は良好であったが, 発病40病日に突然病院を飛び出したり, 隣室に誰かがいる。などといったきかず一時は Chlorpromazine (以下 C. P. と略す) の投与により軽快したが, 幻覚妄想状態が著明となり, 昭和35年7月某神経科に入院した。

身体的には異常所見は認められない。自覚的な精神症状とし「いま一番心配になることは, 人と話しをすることがまずいことだ」と云う, それはどういうことですかとたずねると, 患者は「声をたてゝ話しをするのではないが頭の中に誰かが入つてしまつて頭の中で問答しあう」と答える。誰もいないのに声だけがきこえてくるようなことはないですかとたずねると「はい, 男の声も女の声もきこえてきます」という。更にどんな内容の声ですかときくと「自分に対する悪口です」という。それはいつ頃からきこえてきましたか? 「2ヶ月位前からです」。それは耳からきこえてくるのですか? 「いえ, 耳からではなく, 頭の中へひびいてくるようにきこえてくる」と答える。そのほか自分の考えが他の人にわかつてしまうようなことはありませんかとたずねると「あります」と答える。自分の考えがぬきとられてしまうようなことはありませんか? 「はい, 相手に考えをぬきとられてしまう」。

このような状態のため, C. P. 1日400mgを投与して経過を観察した。

1ヶ月後の8月3日, 以前より落ち着いてきてはいるが, まだきこえてきますかとたずねると「きこえます。女の声です。はつきり耳から(と左耳を患者は指す)きこえます」と答える。どんなことをいつていますか? 「ばかやろう, 死んでしまえ, という」と答える。いまどんなことがきこえますかとたずねると「かわいそうね, かわいそうねといっているのがきこえて

きます」と患者はいう。自分の思つたものが見えるというようなことはありませんか? 「はい, 思つたものが見えてきた, まぼろしのように」と答える。それでは猫を思つてみてごらんさいという「見えます。黒と白の猫です。大きさは30cm位かな」。それはどんな恰好をしていますか? 「ねているようです」という。

それから間もなくして幻覚は消褪したので C. P. の投与を中止したが, 9月中旬になり, 幻覚妄想状態再び顕著となる。

何かきこえますかときくと「声がきこえてくる, 声はチャーンと耳もとにきこえてくる, 声がきこえると自分もその声の通りに喋つてしまう, いわないでおこうと思つてもその通りにいわないわけにゆかない。いまでも口を動かさずに喋つてしまうので苦しい」と訴える。

このためインシュリン療法を行行, 約3ヶ月後, 一時症状は改善されたが「いまは少し頭がガンとしていいる, おもに男の声で小さな声, 頭の中です, 内容は云うはじから忘れてしまう, 見えることはない」と答える。

このような状態のため, こゝで電撃療法を単独で15回行行, この結果, 幻覚妄想状態全く消褪し, 正常状態に復することが出来たので4月中旬退院した。

症例 (第2)

42才, 男, 小工場経営, 昭和38年5月幻覚妄想を主訴として入院した。この患者は昭和36年にも幻覚妄想状態にて分裂病の診断のもとに約1ヶ月の入院治療を行つて軽快退院し, 今度は2度目の入院である。

身体的には異常ない。病識全くなく, 談話は支離滅裂である。どうして入院しましたかとたずねると「妻にすゝめられてきた, 家内に話してもわからない, みえたり, きこえたりするのにそれがいいつにはわから

ない、それ、そこにいるのは弟です、ねている」と興奮して喋る。何かきこえてきますかと問うと「え」と答える。声は耳もとできこえますかときくと「言葉が腹でもいう、頭でもきこえる、外からも東京からもきこえてくる、東京の弟達とも話しが出来る」いま何かきこえてきますか？「え、邪魔するなといえ、と云つた、それは東京の叔父だ、いまは亡き人の霊の声だ」。霊が喋るのですか？「人は死んでも霊はいきている」と患者はいう。昨夜はねむれましたかとたずねると「いゝえ、ふとんの襟布にさわるとビリビリして全身に電流が流れてくる、これは静電気だ、このため一晩中起きていた」と患者は不審そうに答える。誰かにつけねらわれているようなことはありますか「そんなことは………わからない」。誰かにあやつられているような感じはありませんかときくと「自分ではそうは思わないが、時々舌をもつれさせたり、手を動かなくさせたりする、これはきつとあいつ等がそうさせているのだ」と自信ありげに訴える。更に患者は「看護婦が私を監視している」という。それはどういうことですか？「カン看護婦だからカン視している」という。

患者との接触 (Kontakt) は充分には得難い。分裂病の診断に基いて C. P. 200~400mg を投与し、併せて電撃療法を10回行つた。6月中旬には幻覚妄想状態はかなり改善され、Kontakt もよくなつてきた。

何かまだきこえてきますかとたずねると「いゝえ、いまは全然そういうことはない、あの、きこえてきた当時のことはいまでもハッキリ覚えています」と患者は答える。そのときのことを話せますか？「え、きこえかたについても、方向がハッキリわかり、声もハッキリきこえる場合と、頭の中へしみ込むように感ずる場合などがありました」という。自分の考えていることが他人に伝わってしまうようなことはありませんかとたずねると患者は次のように語つた。

「し尿処理をした水にクロレラを入れて培養したら、魚がたいへん有効に飼えるだろうと考えた、するとすぐそれに対して、市長に提案してやれ、やれと激励する大勢の人の声がきこえてくるのです。そのほかにはどうですか？「え、あります、私が前回退院後3、4ヶ月して酒をのむと、きまつて何かきこえてきたり、自分の考えていることがきこえてきました。或るとき私は行きつけの小料理屋で、毎日新聞連載の“仙谷十話”を読んでいました。そのとき私の読む通り、まるで暗誦しているかのように、おかみが私のあとについて云ってくるのがきこえてくるのです。これは私の考えていることがそのままおかみにわかつてし

まうのだ、と判断しました」。また患者は「テレビのドラマを見ていると、自分の考えていることがわかつてしまつているのだ、ぬき取られてしまつているのです」という。また「あるとき寺(小学校時代の女友達の家)へ行つた。そのとき何となく殺気のようなものを感じゾーンとした。そのとき、とつさに下腹(丹田)に力を入れたら間もなくその殺気は消えてなくなつた。2、3日して再びその寺へ行つたら“忌中”と書いてあつた。これはあのとき自分が下腹に力を入れたので力まけして誰か人が死んだのだ。悪いことをしたなと思つた。」また「私は入院前のある日、妻が“南無妙法蓮華経”といつているので“お前”いま何といつたか」ときくと妻は“歌をうたつていた”との返事でしたので、これはテツキリ日蓮正宗(創価学会)の信者が呪をかけているのだ、と思いました」と云う。何か見えてきたというようなことはありませんかとたずねると「はい、入院数日前、妻が薬をくれた。私はその薬の中にアイソトープが入つて居りはしないかと思つたが、それを服用した。偶然、私が目を閉じると、胃の右上隅から、ピカリと光が見えた。それは頭の中に思い出されるように浮かんで見えたのですかときいてみると患者は「いゝえ、蛍光灯を見ていてそのあとで目を閉じると、それが網膜に残像となつて見えるようなことがあります、そのようではない、ハッキリ実物のように見えたのです。もつとくわしく話せますか？「その光の出口は、そうですね、太陽のように輪になつて、真中が非常に濃く周囲に行くにしたがつてだんだん薄らいで、その真中から細い一条の光線が出てきた。色はどんなようでしたか？「その色は、赤と黄色の中間色丁度黄金のような色でした」。それからどうしましたか？「これは大変だ、胃袋に穴があいたと思つた。そしてこの胃の右上隅から光が出ると同時に痛みを感じました」と語つてくれた。

その後、引続いて C. P. 300mg の投与によつて全く幻覚妄想状態消褪し7月末日退院した。

考 察

第1の症例は日本脳炎後幻覚妄想状態著明となり、神経科へ入院した患者である。C. P. などの薬物療法やインシュリン療法を行つたのであるが効果を期待出来ず、入院1年後に15回の電撃療法の後、幻覚妄想状態全く消褪し退院したのである。話しかけと応答の形の声がきかされているが、また更に他からの影響でさせられる gemachtes Erlebnis というものが力強く働いているように思える。このような所謂分裂病様状態

としての自我障害の体験は各所に認められており、むしろそうしたものが背後にあつて、その一つ一つの具体的形式として思考伝播、思考奪取、思考化声があるように考えられる。脳炎後の幻覚には往々にして幻視があらわれるというが、こゝに記された幻視体験は、実体性を欠き、表象像として見られているところから偽幻覚と考えられる。日本脳炎の場合、最もしばしばかつ重く障害されるのは、黒核である。Economo型脳炎の場合も同じである。その精神症状は自我障害、妄想などの分裂病様状態を示すが、分裂病患者と並べて比較すると、対人反応には両者間に異なるものがあるという。即ち脳炎後遺症では、対人反応が比較的健全に保たれている。この症例においても、その対人反応は保たれていた。脳炎後遺症患者が分裂病様状態を示す際には、その鑑別上、此の点を慎重に検討して見る必要があろう。なお本例は、電撃療法により著効を得たが、その顕著な奏効理由は、本例の症状が外因性の分裂病様状態であつたためと思われる。第2の症例は、以前分裂病で入院しており、今回も以前のように、病識なく、談話は支離滅裂であり、Kontaktはよくない。幻覚及び妄想は、初期から主として体感幻覚、妄想知覚に属する体験として語られている。これらは自我障害が更に甚だしい症例であると思われる。それ以外には *gemachte Handlung* の体験も認められる。なお思考伝播は、こゝでは幻聴、妄想知覚に属

する体験形式のうちに組立てられている。なお興味ある事は、患者は少々軽快した際にも、少量の飲酒で容易に再び幻覚を生じた。なおこの症例の最後に示されている幻視は真正幻覚であると思われる。その理由は、実体的であり、外部的客観的空間に認められ、色彩も鮮やかに表現されているからである。体感幻覚についても同様の理由で真正幻覚と考えられる。

結 論

幻覚妄想を主症状とする二つの症例を選び考察した。最初の日本脳炎後遺症例では、幻聴、作為現象などの自我障害を示したが、しかし対人反応の上では、なお良好な Kontaktを保ち、特殊療法によつてその幻聴は消褪した。次の分裂病の症例においては、妄想知覚は前症例に比して遙かに顕著であつた。

文 献

- ①西丸：精神医学入門，(昭34) ②ヤスベルス：精神病理学総論，上巻，(昭28) ③Schneider, K.: Klinische Psychopathologie, (1954) ④笠松：臨床精神医学，(昭35) ⑤立津：器質性脳疾患における分裂病様状態，精神誌，63, 14 (1961)

本症例の発表に便宜を与えられた諏訪湖畔病院副院長中村忠男博士に感謝します。